

- * 弟子たちと最後の晩餐を終えられるとイエスはゲッセマネの園に行かれる。ユダに手引きされた兵士や役人との間に「誰を捜すのか」⇒「ナザレのイエスを」⇒「それはわたしです」というやり取りが二回ある。「イエスは答えられた。『それはわたしだと、あなたがたに言ったでしょう。もしわたしを捜しているのなら、この人たちはこのままで去らせなさい。』」（ヨハネ 18 : 8）イエスは、このわたしだけを捕らえればよい、弟子たちに手をかけることをしないように、という配慮をされた。
- * 共観福音書はカヤパ邸でカヤパから尋問を受けたと記されているが、ヨハネの福音書ではこの後、前大祭司のアンナスのところへ連れて行かれ、その前で尋問されたように解釈できる。いずれにせよ、時のユダヤの最高権力者大祭司の前で「弟子たちのこと、教えのこと」について尋問された。しかし、ここでこの質問には直接は何も答えられなかった。イエスは、いつも公然と誰でも聞くことができる環境で話してきたので、聞いた人たちから聞けばよい、という返事をされる。
- * シモン・ペテロは、イエスがどうなるのだろうかと心配だった。「もう一人の弟子」が大祭司の知り合いであったことから、中庭に入ることができた。門番の女に「あなたもあの人の子弟ではないでしょうね」と問われ、「そんな者ではない」と否定した。皆が炭火をおこして暖まっているところに入って行き、そこでも同じように問われた。「そんな者ではない」。二回目の否定である。そして決定的なことばが投げかけられる。ペテロが耳を切り落とした人の親戚の者がそこにおいて、『「わたしが見なかったとでもいうのですか。あなたは園であの人と一緒にいました。」それで、ペテロはもう一度否定した。するとすぐ鶏が鳴いた。」（18 : 26~27）主イエスは預言されていた。「あなたのためにはいのちも捨てます。」と言ったペテロに対して、イエスは答えられた。『「わたしのためにはいのちも捨てる、と言うのですか。まことに、まことに、あなたに告げます。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。』」（ヨハネ 13 : 38）
- * ペテロは、このときは、嘘偽りなく、真剣に言ったのだと思う。しかし、人間は弱いもので、自分の身に危険が及ぶようになると逃げてしまい、本心と違うことばが口をついて出てしまうものである。しかし、主イエスの眼差しは厳しいというより、暖かく、愛と哀れみに満ちたものであったに違いない。後に主イエスが復活の体を表わされたとき、三度「私があなたを愛することはあなたをご存知です。」とペテロは主への愛、従順を決心している。彼はくじけず、自分の弱さを認めて再出発できたことに注目したい。